

基礎看護技術自己学修会への参加が 看護学生の臨地実習自己効力感に与える影響

中西 恵理, 林 有学, 須藤 聖子, 小林 智子

畿央大学健康科学部看護医療学科

(〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2)

Effects of Basic Nursing Skills Self-Study Workshops on a Self-Efficacy for Nursing Students during Clinical Training

Eri NAKANISHI, Yuhak IM, Seiko SUDO, Tomoko KOBAYASHI

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kio University

(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kita-Katsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

要約 基礎看護学領域において、学生がより主体的に自己学修にとりくむことや、臨地実習に対する自己効力感を高めることを目的として実施している「基礎看護技術自己学修会」への参加が、学生の臨地実習自己効力感にどのような影響を与えているのか検証した。結果から、基礎看護技術自己学修会に参加した学生の臨地実習自己効力感は、参加していない学生の臨地実習自己効力感より高い傾向にあることが示唆された。基礎看護技術自己学修会に参加することで、既修の基礎看護技術の修得状況に対する学生の自己評価を促し、技術練習をすることによって、臨地実習で基礎看護技術を実践することに対する学生の自信につながる可能性がある。

Keywords : 看護学生, 基礎看護技術, 自己学修会, 臨地実習自己効力感

I. はじめに

本学の基礎看護学領域において、学生は1年生前期から2年生前期にかけて、看護に共通する基本技術をはじめとして、療養生活を支える援助技術、健康上の問題を有する対象の診療・治療過程に伴う援助技術といった基礎看護技術を学んでいる。

学生は、基礎看護学領域での学修内容を基盤として、3年生後期に「急性期看護学実習」「慢性期看護学実習」「老年看護学実習」「母子看護学実習」「精神看護学実習」「在宅看護学実習」(以下:各看護学実習)に臨むが、2年生後期以降は講義が中心の学修内容となるため、看護技術を実施する機会は激減する。その上、多くの学生は日々の授業や課題、課外活動等のスケジュールに追われており、日々の課題にとりくむことを優先する傾向があり、学修した基礎看護技術が定着しない状況がある。そのため、看護技術の練習に対する優先度は低くなり、学修した基礎看護技術が定着しない状況である。一度修得した看護技術であっても、定期的に看護技術を実施する機会がなければ、技術を修得した状態を維持することは困難であり、結果として3年生

前期での健康障害を有する対象者を想定した演習において、基本的な看護技術が十分に実施できないといった状況を招いている。また、そのような技術修得状況で各看護学実習に臨むことによって、学生自身も実習の場で看護技術を実践することに対する不安が高まり、ひいては各看護学実習そのものに対する不安を高める要因となっているのではないかと推察される。

そこで、基礎看護学領域では、学生がより主体的に自己学修にとりくむことや、臨地実習に対する自己効力感を高めることを目的として「基礎看護技術自己学修会(以下:自己学修会)」を2018年前期より企画・実施している。

自己効力感とは行動を起こす前に個人が感じる遂行可能感、やりたいと思っていることの実現可能性に関する認識であり「自分にはこれだけのことができるのだ」という主観的な判断をさす¹⁾。先行研究によると、看護学生の自己効力感を高めるためには、学生がペアとなって学び合う「ピア・ラーニング」を取り入れた実習指導方法や²⁾、講義や実習前の学習で修得した知識や理論と、実際の援助が統合されるような経験の積み重ねが有効であること³⁾が報告されている。また、

臨地実習時に達成感を得ることによって看護に対する自己効力感が高まり、そのことが具体的努力に結びつき、就職後の適応性を高める可能性があることが報告されている⁴⁾。以上のことより、各看護学実習の前に、学生が既修の基礎看護技術を実施する機会を持つことによって、実習に向けてより主体的に自己学修にとりくむことができるのではないかと考える。

今回、自己学修会への参加が、学生の臨地実習自己効力感にどのような影響を与えているのか検証したので報告する。

II. 目的

自己学修会への参加が、学生の臨地実習自己効力感にどのような影響を与えているのかを明らかにし、より効果的な自己学修会のあり方について検討する。

III. 方法

1. 対象者

大学の看護学科に在籍する3年生98名のうち、調査への協力に同意が得られた学生。

2. 調査時期と方法

調査時期は2019年3月とした。調査方法は3年生の学生が集まる機会を利用し、無記名自記式質問紙を配付し、集合調査を実施した。

3. 調査項目

眞鍋ら⁵⁾の開発した「看護学生の臨地実習自己効力感尺度(16項目・6段階リッカート方式)」と、自己学修会への参加の有無と回数、自己学修会の内容が臨地実習で活かされたと感じた経験の有無とその内容について質問した。

4. 倫理的配慮

対象者のプライバシー保護に努め、回答済みの質問紙は厳重に管理すること、研究への参加は自由意思であり、研究協力の有無が成績評価に一切影響することはない、不利益は生じないこと、回答済みの質問紙は無記名で取扱い個人名を特定されないこと、回答済みの質問紙の回収をもって研究協力への同意が得られたと解釈することを研究同意書に記載し、質問紙配付時に説明した。また質問紙は対象者自身で回収箱に入れることで、対象者のプライバシーを保護した。不明な点等があった場合いつでも問い合わせができるよう、研究同意書に問い合わせ先を明記した。

質問紙と同意書は別々に回収し、同意書から回答者が特定されないことを口頭で説明した。また、学生へ

の説明は科目主担当者でない教員が実施し、強制力が働かないよう配慮した。

なお、本研究は畿央大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(受付番号H29-29)。

5. 分析方法

得られたデータは、統計ソフトSPSS Ver.23を用いて解析した。有意水準は5%未満とした。

6. 用語の定義

基礎看護技術：

健康障害をもった対象者が安全・安楽に療養生活を送るために必要な援助技術と、対象者の全身状態を観察するために必要なバイタルサイン測定やフィジカルアセスメントの基本技術を指す。

臨地実習自己効力感：

眞鍋ら⁶⁾の先行研究を参考に、「学生が、看護職者が行う実践の中に身を置き、看護職者の立場でケアを行う過程において、看護実践に不可欠な援助の人間関係の形成や専門職者としての役割や責務を果たせようだという気持ちや看護サービスを受ける対象者に向けて看護行為を行う過程で、看護の方法について「実践できそうだ」という自信を示す」ことをいう。

IV. 結果

1. 看護学生の臨地実習自己効力感尺度について

1) 質問紙回収数

83名の学生より回答を得た(回収率84.7%)。そのうち回答に欠損のなかった82名分を分析対象とした(有効回答率83.6%)。

2) 看護学生の臨地実習自己効力感尺度の因子分析の結果について

表1に看護学生の臨地実習自己効力感尺度の因子分析の結果を示す。眞鍋ら⁶⁾が開発した看護学生の臨地実習自己効力感尺度(以下：臨地実習自己効力感尺度)は16項目からなり「かなりよくできると思う」(6点)、「できると思う」(5点)、「ややできると思う」(4点)、「あまりできないと思う」(3点)、「できないと思う」(2点)、「全くできないと思う」(1点)の6段階リッカート方式で質問している。得点は下位尺度それぞれの得点を加算した後に項目数で除算した。

因子分析は、先行研究と同様に最尤法・プロマックス回転を行った。因子数の決定に際しては固有値1以上で固有値が大きく低減する1歩前の基準を用いた。なお、複数の因子に4以上の因子負荷を示した1項目は因子所属が明瞭ではないため、削除した。それぞれ

に先行研究と同様に「対象の理解・援助」(8項目),「友人との関係性維持」(3項目),「指導者との関係性維持」(4項目)と命名した。クロンバックの α 係数は.90～.96であった。

3) 自己学修会への参加が看護学生の臨地実習自己効力感尺度に与える影響

自己学修会への参加が臨地実習自己効力感尺度に与

える影響をみるために、自己学修会に参加したことがある学生と参加したことがない学生に分け、臨地実習自己効力感尺度の下位尺度得点についてMann-WhitneyのU検定を行った。その結果、有意な差はみられなかったが、自己学修会に参加したことがある学生の下位尺度平均得点は、すべての項目において、参加したことがない学生の平均得点より高かった(表2)。

表1 看護学生の臨地実習自己効力感尺度の因子分析表 最尤法(プロマックス回転) n=82

	I	II	III	M	SD
〈第1因子 対象の理解・援助 $\alpha=.92$ 〉					
2. 優先度を考慮して患者に援助すること	.86	.04	-.09	4.43	.77
5. 患者の安全や安楽に配慮して援助すること	.85	.07	-.06	4.77	.69
8. 患者の症状や状態を観察し、症状の変化に気づくこと	.84	-.09	.03	4.50	.72
1. 患者に必要な援助を提供すること	.76	.01	.06	4.55	.76
6. 患者の生活リズムや今までの生活習慣に配慮して援助すること	.73	-.15	.11	4.52	.77
7. 患者との会話や、診療記録、看護記録より患者の全体像を把握すること	.72	-.06	-.03	4.51	.71
4. 患者に合わせ、臨機応変に援助すること	.68	.03	.12	4.23	.85
3. 援助の前・中・後の患者の反応や状態を観察すること	.67	.21	-.04	4.50	.72
〈第2因子 友人との関係性維持 $\alpha=.96$ 〉					
10. 友人と心を許して話すこと	.02	1.00	-.02	5.10	.96
9. 友人に悩みを相談すること	-.01	.97	.04	5.02	.97
11. 友人に自分の気持ちを素直に表現すること	-.06	.89	.08	5.11	.83
〈第3因子 指導者との関係性維持 $\alpha=.90$ 〉					
14. 指導者にわからないことを質問したり、相談したりすること	-.13	-.08	1.02	4.61	.97
13. 指導者にはっきり意志表示すること	.10	-.04	.78	4.46	.95
15. 指導者との人間関係をスムーズにすること	-.01	.18	.71	4.62	1.02
16. いつも意欲的に行動すること	.21	.05	.67	4.60	.91
初期の固有値	7.59	2.04	1.60		
抽出後の負荷量平方和の分散%	29.47	31.18	9.28		
負荷量平方和の累積%	29.47	60.65	69.93		

表2 自己学修会に参加したことがある学生と参加したことがない学生の看護学生の臨地実習自己効力感尺度得点の平均 n=82

	参加あり n=43 平均値 (SD)	参加なし n=39 平均値 (SD)
対象の理解・援助	4.55(.49)	4.45(.70)
友人との関係性維持	5.21(.72)	4.93(1.03)
指導者との関係性維持	4.63(.94)	4.51(.73)

2. 基礎看護技術自己学修会に参加した学生の反応

1) 基礎看護技術自己学修会の概要

2018年4月～6月に、3年生98名を対象として参加者を募り、「基礎看護技術自己学修会」を看護実習室にて実施した。日時・内容・参加人数を表3に示す。

2) 基礎看護技術自己学修会実施の流れ

実施の約1か月前にメールで参加者を募集した。その際メールで、学修会の参加の有無は成績に一切関係しないことを説明した。学修会の時間は1回につき90分とした。

学修会では、基礎看護学領域の教員4名が関わった。

学生が主体的に技術練習を実施できるよう、教員は学生の様子を見守る姿勢で関わり、学生の質問に応じてアドバイスをを行った。学修会のテーマは、3年生後期の各看護学実習で実施する機会が多いと予測した基礎看護技術を中心に、基礎看護学領域の教員で検討し選定した。また、3回目の学修会では学修会運営に関わる学生を募集し、その結果3名の学生が学修会の内容を考え、実施した。

3) 自己学修会の内容が実習で活かされたと感じた経験
今回の調査で「自己学修会に参加したことがある」

と回答した学生は43名(参加率52.4%)であった(表4)。実際に学修会に参加した回数は「1回」と回答した学生が23名(53.5%)と最も多く、4回すべて参加したと回答した学生は1名(2.3%)であった(表5)。

また、自己学修会に参加した学生43名のうち、学修会の内容が実習に活かされたと感じたと回答した学生は40名(93.0%)であった(表6)。また、臨地実習のどのような場面で自己学修会の内容が活かされたと感じたのか、自由記述で回答を求めたところ28名より回答が得られた。自由記述の内容を表7に示す。

表3 基礎看護技術自己学修会の概要

日時	内容	参加人数
4月4日	1. バイタルサインの観察	24名
4月10日	2. 仰臥位から端座位への体位変換・車椅子への移乗介助	20名
5月25日	3. 臥床患者の寝衣交換	16名
6月15日	4. フィジカルアセスメント(バイタルサインの測定と呼吸音・腹部の観察)	28名

表4 自己学修会に参加したことがある学生数 n=82

	人数	%
自己学修会に参加したことがある	43	52.4
自己学修会に参加したことがない	39	47.6
合計	82	100.0

表5 自己学修会に参加した回数 n=43

	人数	%
1回	23	53.5
2回	16	37.2
3回	3	7.0
4回	1	2.3
合計	43	100.0

表6 自己学修会の内容が臨地実習で活かされたと感じた学生数 n=43

	人数	%
自己学修会の内容が臨地実習で活かされた	40	93.0
自己学修会の内容が臨地実習で活かされなかった	3	7.0
合計	43	100.0

表7 自己学修会の内容が臨地実習で活かされたと感じた経験

自己学修会の内容が臨地実習で活かされたと感じた経験（自由記述回答）
1. バイタルサイン測定の基礎を復習できたため、実習でも応用してバイタルサイン測定を行うことができた。
2. 実際に実習で、事前学習で教科書を見る以上に、自信を持って援助をすることができた。技術向上への意欲が高まった
3. 呼吸音の聴取については不安を持っている学生が多いと思うため、実習前にあった呼吸音聴取の回はとても良かったし、実習に役立った。
4. 技術の授業がない時期、実習の前にあったことで忘れていたことを思い出すことができ、実習や知識を思い出すことに活かされた。
5. 忘れかけていた（定着していない）知識を再確認することができ、実習で役に立った。
6. 1回生の時に実施したことで、忘れていたこともあったが、実習前に自己学修会で実施したことで思い出すことができ、実習の時に自信をもってできた。
7. 覆衣交換やバイタルサイン測定など、基礎の授業・実習からブランクがあったため、自信につながった。
8. 忘れていたことをすぐに実施できたため、実習がスムーズに進んだ。
9. 覆衣交換をスムーズに行うのが苦手だったので、練習をしたことで手順を身につけることができ、実習でも戸惑うことが少なかった。
10. 授業の復習をすることができ、実習中にその内容を行うことがあったので活かされたと感じた。
11. 更衣や移乗など、なぜこうするのか、根拠まで振り返ることができた。実習で計画を立てていなくても、とっさに行うことができた。
12. 呼吸音の聴取が必要な患者さんを受け持ったとき、学修会で聴取の学修をしたことがいかされました。
13. 実習前の不安が少しでもなくなり、自信をもって実習に入ることができた。
14. 基礎看護を二回生の時は行わなかったため、一度みんなで復習することで自信につながりました。
15. 実習での実践の有無に関わらず勉強になった。
16. 覆衣交換の方法（臥床患者）
17. 実習前にやった演習を実習で実施したこと
18. 1回生で学んだことが、すっかり忘れていたので、自己学修会を通して復習して感覚を思い出すことができた。
19. 実習での技術
20. 呼吸音の聴取を人形を用いて練習し、副雑音の区別がつきやすくなった。
21. VS測定実施時
22. 全身清拭、陰部洗浄、バイタルサイン（特に呼吸音聴取）
23. 実習に役に立った
24. 呼吸音聴取の自己学修会に参加し、先生や友人に確認しながら学習でき、実習でもその時の印象に残っていることで思い出しながら取り組むことができた。
25. 呼吸音の聴取
26. 忘れていたことを思い出したので、具体的にイメージできた。
27. 体位変換を学修会で行ったが、実習でする機会が多くて、やっておくことで慣れていたので自信をもってできた。
28. 呼吸音の聴取

V. 考察

1. 基礎看護技術自己学修会への参加が学生の臨地実習自己効力感に与える影響

自己学修会に参加したことがある学生の臨地実習自己効力感の下位尺度平均得点は、参加したことがない学生の下位尺度平均得点よりも高かったが、今回の調査では統計学的に有意な差はみられなかった。自己学修会では4回実施したものの、参加した回数が1回の学生が23名（53.5%）、2回の学生が16名（37.2%）と、参加

した学生の約9割を占めていた。参加した回数が少なければ、自己学修会で実施した基礎看護技術の内容も限られている。そのような状況であっても、自己学修会に参加した学生の臨地実習自己効力感より高かった。このことから、自己学修会に参加する回数が増え、自己学修会で実施する基礎看護技術の内容が増えることで、さらに臨地実習自己効力感を高めることにつながる可能性があると考えられる。

江本⁸⁾は、自己効力感が高いほど、その課題を達成

する率が高くなり、目標とする行動に挑戦しようと努力する傾向があると述べている。各看護学実習前の段階で、学生の臨地実習に対する自己効力感を高めておくことで、実習における課題のひとつである「対象者に必要な看護援助を実施すること」の達成に向けて、学生が主体的に学修にとりくむことにつながる可能性があると考えられる。

また、自己学修会に参加した学生43名のうち、学修会の内容が実習に活かされたと感じたと回答した学生は40名(93.0%)であった。そして、臨地実習のどのような場面で自己学修会の内容が活かされたと感じたのか自由記述で回答を求めた内容からは、自己学修会で既修の基礎看護技術を実施することで、定着していなかった知識や技術を再確認し、技術練習を行ったことによって、臨地実習で基礎看護技術を実施することに対する自信へとつながった可能性があると考えられる。

津田・山岸⁹⁾は、既修の基礎看護技術の実施体験は主体的な自己評価を促し、主体的な自己評価は他者から促されたものに比べて高い動機づけとなり、その後の学修活動にもプラスの効果が期待できると述べている。このことから、学生が自己学修会に参加することによって、既修の基礎看護技術を実施する機会を持ち、自分自身の技術の修得状況を自己評価することで、基礎看護技術の定着をめざした主体的な学修に対する動機づけとなる可能性があると考えられる。

また、今回の調査では特に、呼吸音の聴取について自己学修会の内容が臨地実習で活かされたという記述が多く見られた。呼吸音の聴取は1年生で学修しているが、さらに病態生理について学んだ3年生の時期に、呼吸音の聴取や副雑音について自己学修会で復習したことによって、より理解を深めることができ、実習でその知識や技術を活用できたという経験につながったのではないかと考える。

今回の自己学修会は3年生前期に開催した。3年生前期は、後期から開始される各看護学実習に向けて、それぞれの科目で看護過程を展開する等、より専門的な学修内容となる時期である。必然的に、課題の量が多くなるため、学生にとっては基礎看護技術修得の優先度が低くなり、継続して自己学修会に参加することには至らなかった可能性がある。本学では2年生後期より座学が中心の講義内容となり、授業内で基礎看護技術を実施する機会が減少する。そのこともふまえて、2年生後期より自己学修会を実施することによって、3年生の前期まで継続して、基礎看護技術を修得できるような学修を支援する必要があると考えられる。

2. 今後の基礎看護技術自己学修会における課題

現在、自己学修会は各看護学実習を目前に控えた3年生を対象として実施している。しかし、3年生後期の各看護学実習を終えると、学生は新卒看護師として就職するまでの約1年間、看護技術を実践する機会がほぼなくなってしまう。各看護学実習では様々な発達段階・健康障害をもった対象者に看護技術を提供できていたとしても、定期的に基礎看護技術を実施しなければその技術を修得した状態で維持することは困難である。

吉岡ら¹⁰⁾は、卒業後4年目までの看護師は「早期に現場に適応するための学習機会」を看護基礎教育に望んでいたと報告しており、具体的には「日常生活援助技術」や「採血・注射の技術」といった低学年で学修した内容が挙げられていた。水戸ら¹¹⁾は、看護基礎教育卒業時の看護技術到達度として、食事援助や清潔・衣生活援助といった日常生活行動援助に関わる看護技術は、ひとりで実施できるレベルであることが臨床より求められていることを明らかにしている。新卒看護師にとって、日常生活援助技術は就職後早期から実践する可能性が高い看護技術であり、看護基礎教育卒業時に修得できていることが望ましいと考える。

今後の課題として、各看護学実習を終えた4年生が基礎看護技術を修得した状態を維持できるよう継続的に支援を行う必要があると考えられる。

VI. 結論

1. 基礎看護技術自己学修会に参加した学生の臨地実習自己効力感は、参加していない学生の臨地実習自己効力感より高い傾向にあることが示唆された。
2. 基礎看護技術自己学修会への参加は、既修の基礎看護技術の修得状況に対する学生の自己評価を促し、技術練習をすることによって、実習での基礎看護技術の実践に対する自信につながる可能性がある。

今後の課題として、2年生後期から学生が継続して基礎看護技術の修得にとりくむことができるように支援を行うこと、各看護学実習を終えた4年生が基礎看護技術を修得した状態を維持できるよう継続的に支援を行う必要がある。

謝辞

本調査を行うにあたり、質問紙調査への協力をいただいた学生の皆様、自己学修会への参加・運営にご協

力いただいた学生の皆様に、心より感謝申し上げます。

文献

- 1) アルバート・バンデューラ編, 本明寛, 野口京子
訳: 激動社会の中の自己効力, 金子書房, 東京,
1997.
- 2) Ylva, P., Gunilla, M., Christine, L. et al.: A
peer learning intervention for nursing students
in clinical practice education: A quasi-
experimental study, Nurse Education Today,
51, 81-87, 2017.
- 3) 眞鍋えみ子, 笹川寿美, 松田かおり他: 看護学生
の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・
妥当性の検討, 日本看護研究学会雑誌, 30 (2),
43-53, 2007.
- 4) 岡本 響子, 岩永誠: 看護学生から看護師に至る
就職前後の個人要因とストレス反応・バーンアウ
トの検討-実習時と就職後3ヵ月目との比較-,
日本医学看護学教育学会誌, (22), 26-32,
2013.
- 5) 前掲3)
- 6) 前掲3)
- 7) 前掲3)
- 8) 江本リナ: 自己効力感の概念分析, 日本看護科学
会誌, 20 (2), 39-45, 2000.
- 9) 津田智子, 山岸仁美: 看護基本技術の修得初期段
階における初学者の自己評価の特徴, 福岡県立大
学看護学研究紀要, 11 (1), 1-10, 2014.
- 10) 吉岡由喜子, 石橋佳子, 金木美保他: 卒後4年目
までの看護師が看護基礎教育に望んでいること,
太成学院大学紀要, 18 (35), 61-69, 2016.
- 11) 水戸優子, 小山真理子, 片平伸子他: デルファイ
調査による看護教育者と看護実践者が合意する看
護基礎教育卒業時の看護技術到達目標と到達度
に関する検討, 日本看護科学学会誌, 31 (3), 21-
31, 2011.

